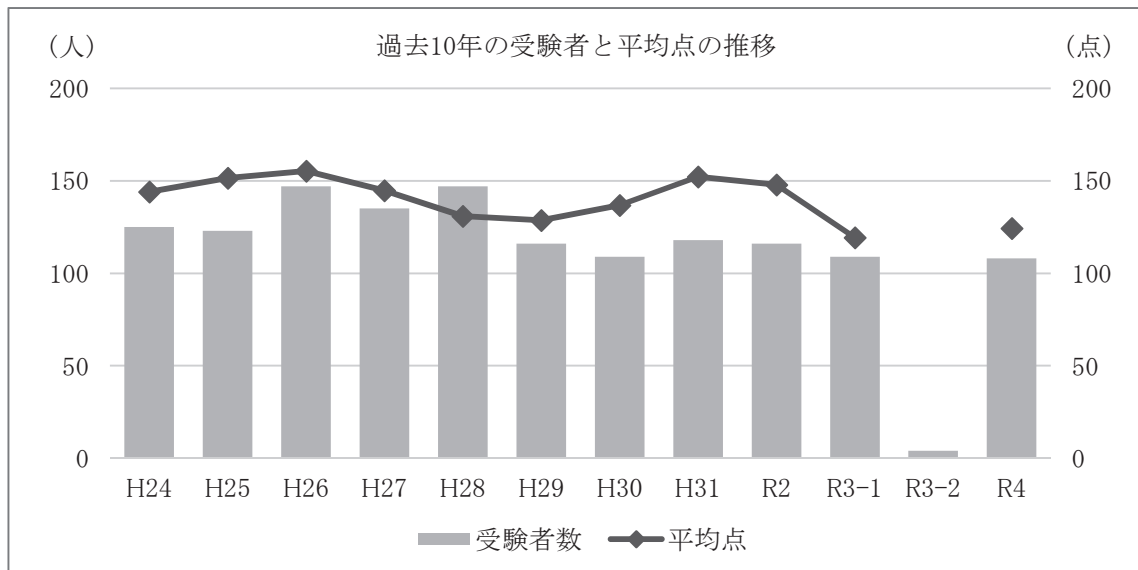


ドイツ語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

大学入学共通テストの第2回が実施され、受験者数108名、平均点124.26点であった。昨年度、以前のセンター試験よりも難度がかなり上がり、今年度の受験者数が減少するのではないかと懸念していたが、100名以上が「ドイツ語」に挑戦したことにひとまず安堵した。



学習指導要領には「英語に準ずる」と明記されているだけであり、英語以外の個々の外国語に関して、準拠すべき基準が明確になっていないため、共通テスト「ドイツ語」の出題方針や出題範囲については、高校で教える立場として受験者を「高校で3年程度ドイツ語を継続して学んできた」と仮定し、評価したい。

また、ドイツ語では高校向けの文部科学省による検定教科書は存在しておらず、そもそも高校の授業用に編纂された教科書が存在しない。高校で授業を担当する者は、大学の授業で用いられる教科書の中から適していると思うものを選定して利用しているのが現状である。このような現状を踏まえると、教科書の内容を評価基準としてどのように設定するのかは非常に難しいが、以前から出版されている文法項目を中心に学ぶもの、あるいはCEFRに準拠するようなコミュニケーションベースで学ぶ教科書のどちらを中心に学んだとしても解答できるかを検討していきたい。また設問で扱われる題材は、高校生にとって身近な日常生活に関する話題から、大学で学びたい受験者にふさわしい、やや学術的なものまで様々な題材が扱われることを望む。

高校現場においては、CEFR準拠やコミュニケーション重視の教科書を用いた授業が多くなってきているように感じる。その場合、各課や表現を学ぶ際にタスクを達成することが求められ、文法だけを扱う授業よりも多くの時間を要する。ドイツ語の授業時間が必要に応じて増やせるわけではないので、以前の文法訳読中心の授業より、授業で扱う内容を精査しなければならない。

大学入学試験のひとつである共通テストを受験する者には、文法の規則を説明するのに必要な用語は、ある程度学んでから大学へ入学するべきだと考える。

また、授業で扱う教材や、問題集で目にするかどうか、どの程度目にするのかを、難易度の参考

にする。母集団が少なく、ドイツ語学習環境は受験者によって多種多様であり、統計的に妥当な散らばりなのかは判断できないが、担当した生徒が多く間違えた設問や選択肢などの傾向はある程度参考にできる。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

全体の構成は大問7つ、設問数は昨年度と同じく51問、文法、対話、広告文、物語、特定のテーマ下での長文など、受験者には幅広い学習が求められる出題構成である。

第1問 発音やアクセント、動詞や複数形のつくり方など基本的な知識を問う出題。

問1 複合語に含まれるdの発音を区別する。

問2 母音の長短を問う出題。単語が分からずとも②のみzuschauenという分離動詞から派生した語であることが分かれば、難しくはない。

問3 共通する語頭のつづりを持つ2つの名詞と形容詞のアクセントを区別する出題。アクセントの位置はつづりからある程度判断可能。

問4 不規則動詞の人称変化を問う基本的な出題。③stehlenは、動詞の不規則変化を学ぶ際に最近の教科書ではあまり見かけず時間をかけて教えないが、受験者には変化を身に着けておいてほしい動詞。

問5 不規則な変化をする動詞のうち、不定形の幹母音「i」が過去基本形になった時に「a」に変化する動詞を選ぶ出題。不規則変化動詞の過去形はそもそも幹母音が変化し、問題文に「下線部の母音」と表記されているので、例示することに疑問が残る。

問6 複数形での変化語尾を問う出題。選択肢に挙げられた名詞の難易度は適切だと考える。

問7 特定のテーマに属さない語を探す。①の単語を知らない可能性はあるかもしれないが、他の選択肢を消去可能ではないか。

第2問 文法的知識の正確性が問われている。所有冠詞、再帰動詞、副文など広範囲から出題されている。文法事項を着実に、正確に学んだ受験者であれば正答を選ぶことができる出題。

問1 前置詞の用法を問う基本的な出題。Studiumの名詞の性がつづりからも中性名詞だと判断可能か。

問2 sich⁴ beeilenという基本的な再帰動詞で用いる再帰代名詞を問う出題。

問3 関係代名詞を答える。先行詞である、Liedが中性名詞であることが分かるか。分からなくても、不定冠詞のeinから推測可能。

問4 対価に対して①fürを用いる。fürが正答ではあるが、この用法を教科書等で学んだり、教えたりはしない。前置詞のイメージから類推することも難しい。英語のforの用法から類推可能かもしれない。

問5 話法の助動詞を用いた受動態のabschickenの過去分詞③を選択する。

問6 besuchenを用いた現在完了形の助動詞を問う。besuchenは完了形を学ぶ際に、注意すべき基本的な動詞。

問7 形容詞の変化語尾を問う出題。dieser型、男性名詞Mantel、主格を問う基本的な出題。

問8 駅でのやり取りでよく用いられるhin und zurück（往復）という表現が分かるか。教科書のテーマとして鉄道の旅のような題材はあまり見かけなくなっている。

第3問 副文など、比較的複雑な文構造を持つ文を、与えられた語を空所に当てはめて完成させる出題。余計な選択肢が1つあるが、受験者は傾向を把握しやすい。唯一受験者が文を構成するので、表現力を問うことができる。昨年度より1問減ったのが残念である。

- 問1 従属接続詞weilと並列接続詞dennの文構造の違いが分かるか。17の後ろのichとbleibenの位置がポイント。
- 問2 zu不定詞句の並び替えだと分かればさほど難しくはない。gehenに対しschwimmenが補足的に用いられている。
- 問3 従属接続詞dassに導かれる副文内の並び替え。副文内が未来形であること、besichtigenの意味が分かればさほど難しくはない。
- 問4 疑問副詞wannを従属接続詞的に扱っている。さほど迷う要素はないように思えるが、sicherを比較級と捉えた受験者もいたのではないか。
- 第4問 一連の比較的長い対話等を読み、設問に答える。テーマは、「大学生の住まい探し」。住まいに関する話題は、近年の教科書でよく扱われているが、使用語数が多く、読み解くのに時間を要する。更に、対話の場面が3つに分かれているが、問題文の流れを設問が中断するような形で配置されており、読みにくい印象を受けた。特に24～26は、WGに到着する前に設問を置くことも可能ではないか。場面が移り変わるときの状況を説明する言語に日本語とドイツ語の2種類が用いられているが、どちらかへ統一してほしい。
- 問1 下線部④の前後のMikaのセリフから判断可能である。
- 問2 話し手の気持ちを汲み取る出題。その後のMikaのセリフから気持ちを類推するのだろうが、発言した時の意図が、その後の話の流れに関係するとは限らない。問題文に「下線部⑤の時点での」とあり、それ以前のMikaの発言から、一人暮らしがしたいという思いは必ずしも読み取ることにはできない。「Dianaに相談した時点で…」のように質問してもよかったのかもしれない。実際に、Mikaの気持ちが分かるのは、次のMikaのセリフalleine wohnenの部分である。
- 問3 問題文を含んだDianaのセリフから判断する。③以外の選択肢は、ネガティブな表現となっている。対話重視の教科書で学んだ方が、理解しやすいのではないか。
- 問4 最初の対話でMikaが言っている、苦情の内容の言い換えを選ぶ。直訳となるようなことは言っていないが、「パーティーが毎晩、眠れない、耐えられない」などのキーワードから類推する。他の選択肢は、対話で述べられているが、引越したい理由には当たらない。よく練られた設問である。
- 問5 Hausarbeitでする行為の例を選択する。本文の流れとは関係なく、単語の意味が問われている。
- 問6 対話の中のRamadan, muslimische Fastenzeitの言い換えをreligiösととれるか。ラマダンに対し注の説明がないのは、多文化に対し理解が進んだとも言えるかもしれない。
- 問7 テキストメッセージの文と、対話から適切なものを選ぶ。
- 問8 対話を読み進めれば、消去法で判断可能。太陽が東から登ることと、方位記号が読めればより理解が深まる。
- 第5問 大学生2人が、スポーツ・コースを選ぶやり取りとそれに関わる情報から読み解く出題。対話や掲示板、メールやチャットなど複数の情報を合わせて読み解く必要がある。
- 問1 対話内の「指が折れた」という表現を①verletztと結びつけることができるか。
- 問2 下線部③ Ohne mich「やるなら私抜きでやって」という表現と、④Nein, danke!と同じ方向性の意味にとることが難しかったのではないか。Nein, danke. はコンテキストによって様々な意図を含んで使われることを理解している必要がある。シンプルな組み合わせでありながら考えさせる問である。
- 問3 34の前後に書かれた対話文から注意深く時間から逆算して時刻を考える。スポーツ・コースの始まる時刻と、その場所まで5分程度しかかからないことが分かるか。時の表現を受験

者は押さえておきたい。

問4 対話文のohne Geräteが分かるかがポイント。分からなくても、消去法からも判断可能か。ただ、arbeitenが日本語のアルバイトと同じ意味となるのかは疑問が残る。特に授業でarbeitenと日本語のアルバイトは違っていると聞いている受験者が①を正答と思った可能性も否定できない。

問5 メールから希望のコースがインストラクターの病気により無くなったことが分かるか。メールの内容を理解しているかを問う良い出題であるが、ausfallenが「(コースが) 無くなる」はやや難しい。問題文や選択肢にあるその他の表現も受験者にとっては類推しづらい表現が多くあったのではないか。

問6 今までの対話やメール文の情報を総合して判断する。球技、外、残りの席の数から判断すると②となる。思考力を測る良問だと考えるが、問5で躓いたまま内容がとりきれなかった受験者もいたのではないか。

第6問 物語からの出題。ドイツ語の場合、物語では過去形が多用され、物語特有の表現を知っていなければならないが、昨年度ほどの読みにくさは感じない。昨年度より1問増。なお、出題された物語を知っていた受験者もいたようである。

問1 物語の流れに合わせて、選択肢を並び替える。並び替える文の真ん中に前もって1文固定されており配慮がなされている。ただ、登場人物と起きた出来事を整理できないと、両方正答するのは難しかったのではないか。最初の出題として解くには時間がかかるかもしれない。

問2 登場人物の主張を整理する。選択肢B、Cは本文中では述べられていない。2段落目の内容理解。

問3 3段落目のUrteil以降の文が判決内容である。全部を読み解けなくても、文意が取れれば正答にたどり着くのはさほど難しくはない。

問4 選択肢は過去形が用いられており表現もやや難しい。また、本文中の登場人物に起きたことを考えながら選択肢を読み進める。選択肢、本文とも丁寧に読み込む必要がある。

問5 ここまでの設問を苦勞なく解けた受験者にはそんなに難しくはないが、あらすじを取れない受験者は①～④の中で迷うことになったのではないかと考える。

第7問 睡眠に関する記事である。レムとノンレム睡眠について注が書いてあるが、多くの受験者は他の教科で睡眠について学んでいる。学術的な題材ではあるが、初めて見聞きするものでもないのでもそこまで読みにくさは感じないだろう。昨年度と同様、問1～6まで言い換えや要約を選ぶ。問1～5はドイツ語での出題である。本文と設問を十分に読み込む時間を確保できれば、さほど難しくはない。tiefがノンレム睡眠、leichtがレム睡眠をそれぞれ表しており、それぞれの睡眠について整理できることがすべての設問において重要である。局所的に理解できているかを確認する出題が多い。

問1 ②のalleの意味を「～毎に」と取れるか。1段落目3～5行目に言及されている。

問2 2段落目6行目näher an der Wirklichkeitと③が言い換え表現となっているかが分かる語彙力が必要。

問3 3段落目1行目がほぼ同じ表現である。

問4 5段落目中の「11日間連続起きていた」という本文の理解がまずは必要であり、その実験の後、15時間で回復したことが分かるか。本文、設問、選択肢の理解が正確にできないと正答できない。

問5 5段落目の1文についての言い換えを選択する。

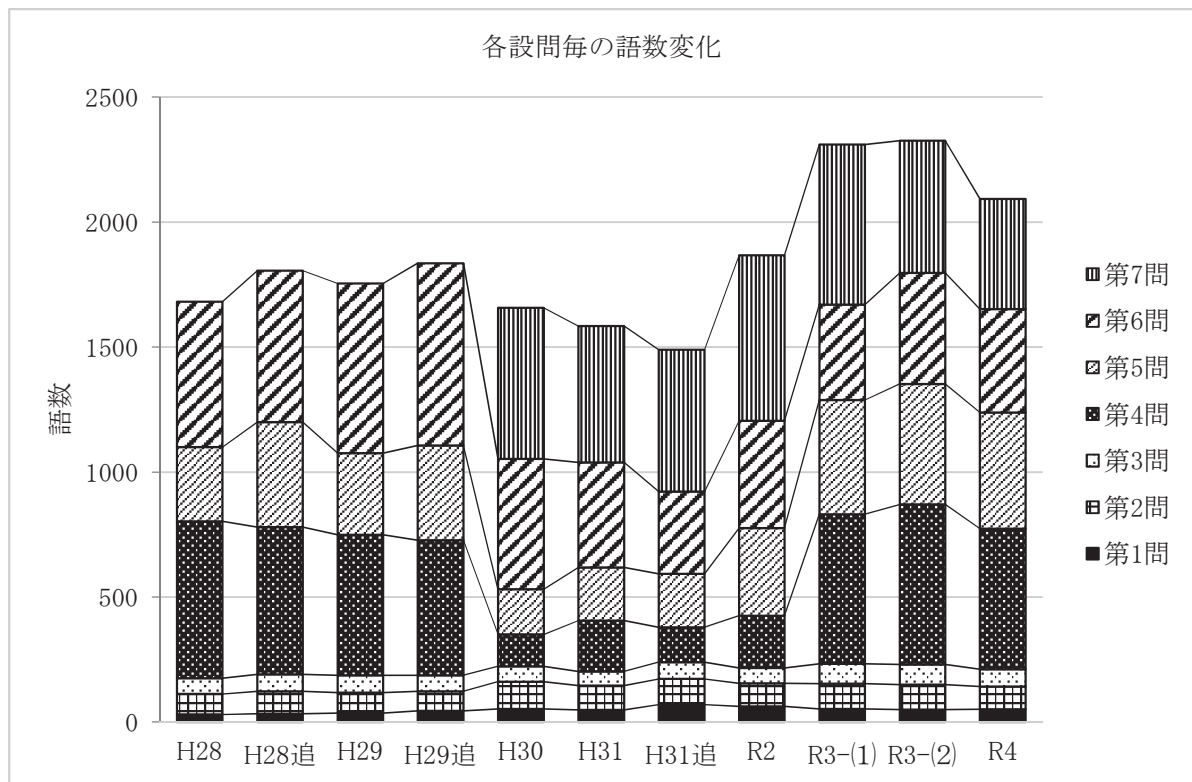
問6 第4段落についてのまとめを選ぶ。設問は、読む順番通りである必要は必ずしもないのかもしれないが、問6が問4や問5の後に配置されていることに違和感が残る。

問7 本文をしっかり読んでいけば、迷う要素は少ないと思われる。ただし、日本語だけを頼りに解答した受験者もいたのではないかな。

3 分量・程度

昨年度の共通テスト(1)及び共通テスト(2)より1割程度使用語彙が減った。昨年度の共通テストを基準として準備していた受験者は、分量が抑えられ取り組みやすい印象を受けたのではないかな。全体的に口語表現が使われたとしても、状況や場面から類推可能であり、語彙や表現に配慮を感じる。

昨年度この場で、「第3問では使われない選択肢が増え、迷う要素が増えたことも加わり、受験者にとっては大きな負担だったようだ」と述べたが、今回は使われない選択肢があっても、求められる構文や語彙がきちんと身につけていけば、迷う要素は少ない。



4 表現・形式

昨年度、この場で指摘した、類推不可能な口語表現はなかった。また、過去形を用いた第6問も使用語彙に配慮を感じたが、CEFR準拠のコミュニケーションを重視した教材を用いて授業を進めるとなると、過去形を多く含む物語を集中的に学ぶ時間はほとんどないのが高校の現場の実情である。

第4問、第5問では文体や、対話が行われている時と場所の移り変わりがあり、その間にチャットやメール、スケジュールなどその他の要素が組み込まれている。複数の要素から出題されることに何ら問題はないが、話の流れを追っていく中で、流れを中断するように設問が配置されていたり、最後まで読んだ上で最初の対話に戻ったりする必要がある。余り、長い設問文にならないような配慮なのかもしれないが、読みにくさを感じた。場面が移り変わるときの場面状況についての説明が日本語とドイツ語での2種類あるが、どちらか一方へ統一して欲しい。

共通テスト「ドイツ語」にはリスニングの設定がなく、受験者にアクセントや母音の長短への意識を持たせるためにも、アクセントや母音についての出題を維持してほしい。

「思考力・判断力・表現力等」を問うことを共通テストでは意識しているのかもしれないが、記述式の出題がない中で、それらの能力を問うには限界があると感じている。特に、長文からの出題では1文対1文の文意を問うような出題が昨年度より多く感じた。果たして入試で問おうとしている「思考力・判断力・表現力等」なのかは大いに疑問が残った。

5 ま と め

共通テストは、教える側にとって、授業を組み立てる際の参考になっている。そして、3年間継続してドイツ語を学習する生徒にとっては、その到達度を測る指標となっており、英語以外の外国語に積極的に取り組み、意欲的に学習する生徒の実力が測れるような唯一の枠組みとなっている。しかし、コミュニケーションをベースとして授業を組み立てていくと、物語文のような過去形で書かれた文章は教科書には掲載されていない。来年度以降も継続して物語文が第6問のように出題されるのであれば、3年間の授業計画および配分を変更せざるをえないだろう。

令和7年度試験までは、共通テストに英語以外の外国語が残ることが決まり安堵しているが、それ以降の実施は保証されていない。常に、大学入試あるいは、共通テストに英語以外の外国語があるかないかについて、生徒、教師は不安を抱き、翻弄され続けている。持続可能な社会の実現に向けて、様々な文化、言語圏の人々が協力していかなければならない現代において、変わらず英語のみを重視する日本の中等教育に危機感を抱いている。

英語以外の外国語を学ぶことを通じて、言葉の背景にある文化や表現の多様性に触れることができる。それぞれの文化や場面に合わせた振る舞い、適切な表現を選択できることこそが、外国語学習に必要な、新学習指導要領の目指す「思考力・判断力・表現力等」ではないだろうか。複数の言語に触れて身に付いた感覚は、英語や母語など、言語を用いた全てのコミュニケーションにおいて、「思考力・判断力・表現力等」を発揮する力となるだろう。

幾つかの観点から意見を述べましたが、「英語」とは違い「ドイツ語」の学習環境は多種多様であり一般化することができない中で、高校の現状を鑑みて「ドイツ語」の問題作成に多くの時間と労力を割いて下さっている問題作成委員の方々に心から感謝申し上げます。